# 「図書館通論」および「図書館概論」の比較と若干の考察

前　川　芳　久

## 1　はじめに

樹村房発行の「図書館概論」（新図書館学シリーズ第１巻）が2005年改訂された。この新版と旧版との違いの調査が私の最初の意図であった。つぎに他社の図書館概論との比較を加え、さらには、遡って図書館通論の時期から、歴史的にその構成および内容の変遷を検証しようと思い至った。そしてこの過程を経て「図書館概論」について若干の考察を試みたのがこの小論である。

本題に入る前に疑問が二つ生じたのでふれておきたい。第１は、「図書館通論」と「図書館概論」の違い。第２は、「図書館通論」および「図書館概論」の科目は、図書館法施行規則の規定（昭和25年）後採用されたが、それ以前に該当の科目が存在したかどうか、の２点である。

## 2　「図書館通論」と「図書館概論」の違いについて

「図書館通論」（以下「通論」という）と「図書館概論」（以下「概論」という）は、ほぼ同意味でいづれでも良かろうという意見①もあるが、両者には少しく違いがあるように私は思う。「通論」は「全体的な」とか「総論」の意味合いを持つが、「概論」は「おおよそ」とか「概略」の意で、「全体」や「総て」の意が薄い。両者は他の科目と違って特定分野を持たず、基本的には図書館全般の事項を対象にするが、「概論」は「通論」より範囲が狭いと思われる。施行規則の司書科目が「通論」、司書補

の科目が「概論」と分けたのはそうした意味合いではないかと、私は推量する。

## 3 「通論」または「概論」に該当する科目は昭和25年以前に存在したか

図書館員の教育養成のために、近代日本で組織的に実施されたのは諸種の講習会であろう。竹内　悊の論文[②]から、講習会の開催と講習科目が知られる。最初の講習会は、日本文庫協会（明治41年「日本図書館協会」と改称」）主催で明治36年開催。その後、当協会主催のほか、文部省主催で、明治年間に２回、大正年間に３回、昭和８年～同18年に、文部省、県中央図書館主催で、合わせて103回開催。大学や地方自治体主催でも開催された。これらの中から主な講習会の講習科目を一覧にしたのが表１である。

明治末年から大正を経て戦後の昭和21年（同志社大学図書館講習所講習会[③]）までに開催された主要な講習会では「通論」、「概論」の科目も、またそれらに相当する科目も見当たらない。ただし、文部省図書館員教習所の開所後開催が増加した地方の講習会の講習科目のなかに「図書館概論」が挙げられている[④]が、まだ一般的でなかったことはうかがえる。当時は、目録法や分類法、管理法など整理、技術面が課題の中心で、図書館を総体的に論じられなかったのではないかと私には思われる。

## 4 「図書館通論」概観

最初に取り上げるのは、1970年代と80年代の「通論」のテキスト（以下、略して「T」と表わす）で下記の４種である。

T①　武田虎之助　　「図書館学概論」[⑤](現代図書館学叢書１)
　　理想社　1976

T②　安部叁巳ほか　「図書館通論」(講座新図書館学１)
　　教育出版センター　1977

T③　彌吉光長　　「図書館通論」(図書館学テキストシリーズ1)

表１　主な講習会の講習科目

| 日本文庫協会 明治36年 | 文部省職員教習所 大正10年 | |
|---|---|---|
| 図書館設置法 | 内外図書館史 | 一般教育 |
| 図書館管理法 | 洋書目録法及演習 | 印　　刷 |
| 目録編纂法 | 図書館管理法 | 絵画史 |
| 欧米図書館史 | 和漢書目録法及演習 | 文　　学 |
| 図書館管理及実習 | 分類法実習及演習 | 英　　語 |
| 目録編纂及実習 | 文化科学一般 | 独逸語 |
| 図書分類法 | 自然科学一般 | 倫　　理 |
| 和漢書史 | 社会教育 | 見　　学 |
| 和漢書史学補遺 | | |

| 文部省　京都大学 大正14年 | 同志社大学図書館講習所 昭和21年 |
|---|---|
| 図書館運用法 | 図書館管理 |
| 図書館最近の傾向 | 図書館経営法 |
| 図書の目録分類法 | 図書館史 |
| 図書の選択法 | 読書指導 |
| 基本図書及参考図書 | 図書館教育 |
| 和漢書目録記入法及実習 | 各種図書館 |
| 洋書目録記入法及実習 | 図書館統計 |
| 実習京都府立図書館 | 海外図書館事情 |
| 実習大阪府立図書館 | |

理想社　1982

Ｔ④　小野泰博　　「図書館通論」（現代図書館学講座１）

東京書籍　1983

各テキストの章の構成と各章のテーマおよび各章の小節数と各章の頁数および全体の頁数を表２に表した。頁数は、Ｔ①とＴ④が160頁前後、Ｔ②とＴ③が230頁前後、章立ては、前者が５，６章、後者が７，８章で

表2　図書館通論の章の構成とテーマ

| | T① | T② | T③ | T④ |
|---|---|---|---|---|
| 第1章 | 社会と図書館 7・9p | 序　説 2・5p | 序章　図書館とは何か 6・10p | 序　説 3・24p |
| 第2章 | 図書館の構成要因 6・8p | 図書館の思潮 2・21p | コミュニケーション論 6・21p | 各種図書館（資料2） 6・38p |
| 第3章 | 図書館の成立条件 12・20p | 各種図書館 6・59p | 読書と社会 10・26p | 図書館の管理 6・27p |
| 第4章 | 図書館の奉仕 7・13p | 図書館行政 3・71p | 各種図書館の機能 7・31p | 図書館運動 3・30p |
| 第5章 | 図書館の分類 12・18p | 図書館管理 6・26p | 図書館サービス 8・42p | 図書館員の養成責務研修 3・14p |
| 第6章 | 図書館の目録 9・14p | 障害者に対する奉仕 4・39p | 図書館職員 7・17p | |
| 第7章 | 図書館構想（大学図書館論） 18p | | 図書館行政と管理 7・31p | |
| 第8章 | （付録4）35p | | 図書館学への道 7・37p | |
| 全体の頁数 | 156頁 | 233頁 | 236頁 | 163頁 |

各章欄の数字は前半が小節数、後半が頁数

ある。T①とT④は1章分少ないが、それぞれ付録又は資料が1章相当分あり、ほぼ同数頁のテキストは章の数も同数である。

各テキストの章のテーマを見よう。T②とT④は、第1章が序説になっていてテーマがわからないが、T②の内容は、図書館の意義および図書館の構成の2小節、T④は、図書館の意義、図書館の構成および図書館の歩みの3小節である。これらのテーマは各テキストに共通しているが、ほかには、図書館の歴史、各種図書館、図書館行政と管理の3テーマは、T②、T③、T④の各テキストで共通である。T①は、「図書館学概論」であるため、「通論」と共通のテーマが少なく、分類論、目録論、奉仕論等の専門的技術論が一つの重点になっている。

各テキスト独自のテーマをみよう。

T①は、図書館の分類、目録および図書館構想（大学図書館論）、T②は障害者に対する図書館奉仕、T③は、コミュニケーション論、読書と社会、および図書館学、T④は、図書館運動となっている。

これまでに明らかになったことは、テキストが160頁で6章、230頁で8章程度であり、その2分の1から3分の2は、各テキスト間で共通のテーマであるが、それぞれ独自のテーマが最低1つあり、多いテキストでは3つ有している。これが章の構成や頁数などから見た概観である。

## 5 「図書館通論」の内容と各テキストの特徴

表3は、内容項目を41点取り上げて、各テキストが扱っている状況を表したものである。図書館通論の4テキストだけでなく、次の検討対象である図書館概論等のテキストも含めた12テキストの表である。

最初に全体を通してみると、項目数最多のテキストはT③で29、ついでT④が24、T②が17、最少はT①の9項目である。頁数との関係では、T④はT②とT③より70頁程少ないが、項目数ではT②より多い。T④には、次のようなT②には無い、多くの項目がある。図書館員の倫理綱領、図書館職員の研修や養成、図書館運動、著作権等であり、これらが項目数の差となった。4テキストすべてに無い項目が幾つかある。図書館政策、生涯教育と図書館、類縁機関、外部委託、電子化などである。3テキストに無い項目は、図書館経営、図書館建築、設備、図書館協力、情報化社会と図書館、図書館職員の研修、情報学、出版流通、コミュニケーション論など。4テキストあるいは3テキストで取り上げていない項目が少なくない。反対に多く取り上げられた項目を見よう。4テキストすべてにある項目は、図書館の意義、および図書館の機能の2項目、3テキスト共通の項目は、図書館の種類、図書館の歴史、図書館の基準、図書館の自由に関する宣言、ユネスコ公共図書館宣言、図書館の管理、図書館行政、図書館財政、組織、図書館法規、専門性、点字図書館

表３　図書館通論と図書館概論の内容項目

| 項目＼T | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図書館の意義 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館の機能 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館の種類 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館の歴史 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館の基準 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館学の五法則 | | | | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館の権利宣言 | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館の自由に関する宣言 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | |
| ユネスコ公共図書館宣言 | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 知的自由 | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | | |
| 図書館の管理 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 図書館経営 | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | ○ | |
| 図書館行政 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ |
| 図書館財政 | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | ○ |
| 図書館政策 | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館組織 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 図書館建築・設備 | | | ○ | | ○ | | | | | | ○ | ○ |
| 図書館評価 | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| 図書館法規 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ |
| 図書館協力 | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館サービス | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館運動 | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | |
| 情報化社会と図書館 | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ |
| 生涯涯教育と図書館 | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | |
| 地域域社会と図書館 | ○ | | | ○ | | | ○ | | | | | |
| 専門性・専門職制 | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館職員の研修 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館職員の養成 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

注　T①～T④は図書館通論　T⑤～T⑧は図書館概論（T⑧は参考テキスト）T⑨～T⑫は、すべて樹村房発行の図書館通論と図書館概論

表3（つづき）

| 項目＼T | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図書館員の倫理綱領 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館専門団体 | | | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 図書館学 | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ |
| 情報学・情報科学 | | | ○ | | | | | ○ | | | | ○ |
| 電子化・電子図書館 | | | | | | ○ | | ○ | | | | ○ |
| 点字図書館他の図書館 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | |
| 地域文庫 | | | | | | | ○ | | ○ | ○ | | |
| 類縁機関 | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 外部委託 | | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | |
| 出版・流通 | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 著作権 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ |
| コミュニケーション論 | | | ○ | | | | | | ○ | | | |
| 読書 | | | ○ | | | | | | | | | |

その他図書館の12項目である。これらの共通項目が即ち、「通論」の内容を構成する基本的項目で、これらに各テキスト独自の項目が加わって「通論」が形成されている。

次に各テキストの特徴を見よう。T②は、表3の中で扱っている項目数は17で多いとはいえないが、図書館評価を経営の観点から取り上げているのはこの年代のテキストには珍しく、障害者サービスに1章あてていることと合わせて特徴と言える。T③は、扱っている項目数が29で4テキストの中では最多である。特にコミュニケーション論や読書関係は、今回の他の11テキストのいづれも扱っていない項目である。図書館学の項目は、他のテキストでも扱っているが、T③は、35頁を費やして、ドイツ、アメリカの歴史的流れや情報科学も含めて論じた1章を設けているのが特徴となっている。T④は、扱っている項目数がT③に近く、ほとんど共通項目である。図書館運動の項目に「中小レポート」や「市民

の図書館」を含めているのは他のテキストではみられない、T④の観点である。

## 6 「図書館概論」概観

取り上げるテキストは次の4種であるが、T⑧は参考のために加えたテキストである。

T⑤　高山正也ほか　「図書館概論」（講座図書館の理論と実際1）
雄山閣　1992

T⑥　北嶋武彦ほか　「図書館概論」（新現代図書館学講座2）
東京書籍　1998

T⑦　塩見　昇　「図書館概論」（JLAテキストシリーズ）
四訂版　日本図書館協会　2004

T⑧　藤野幸雄ほか　「図書館情報学入門」有斐閣　1999

各テキストの章構成と各章のテーマおよび各章の小節数と各章の頁数、および全体の頁数を表4に表した。

章の数は、T⑦が最多で13章、T⑤は、10章と付録7種、T⑥は9章と資料15種。T⑤とT⑥では、付録又は資料を巻末にまとめているがT⑦は各章の中で関連の資料等を紹介している。頁数は、T⑦が最多の284頁、T⑥が267頁、T⑤237頁の順。「図書館通論」（以下「通論」という）に比べて、「概論」は章の数、頁数ともに多く、頁数は、「通論」の最少156頁に対して「概論」の最多はT⑦の284頁で、その差は130頁。「通論」の最多236頁に比べても50頁ほど多い。この差の要因は、T⑦独特の章の構成にあるが、これを別にしても、全体的に「概論」は「通論」より2，3章多い。章のテーマで「図書館の自由」、「ネットワーク」、「図書館関係団体」などが「通論」に無いのがその理由である。T⑦の独自の章構成とは、他のテキストが各種図書館あるいは図書館の種類の章で扱う1章を、館種ごとに割り当てて5館種で5章設けていることである。しかし、取り上げ方は異なっているが、このテーマに関する頁数は、T

表４　図書館概論の章の構成とテーマ

| | T⑤ | T⑥ | T⑦ | T⑧ |
|---|---|---|---|---|
| 第１章 | 図書館の意義 5・11p | 現代社会と図書館 2・15p | 現代社会と図書館 6・29p | 図書館の意義と役割 3・18p |
| 第２章 | 図書館の機能 5・16p | 図書館の意義と種類 4・24p | 図書館法規と行政 5・29p | 図書館の歴史 5・34p |
| 第３章 | 図書館の種類 6・13p | 各種図書館の機能と課題 6・78p | 図書館の理念 5・42p | 図書館の機能と種別 2・23p |
| 第４章 | 図書館の類縁機関 5・17p | 図書館の歴史現状と最近の動向 2・29p | 地域社会と図書館 3・16p | 図書館のネットワーク 4・22p |
| 第５章 | 図書館情報政策行政 4・14p | 図書館の行政 3・36p | 公共図書館の制度と機能 4・24p | 図書館活動の新展開 2・15p |
| 第６章 | 図書館の経営管理 5・15p | 他の図書館類縁機関との相互協力ネットワーク 3・15p | 学校図書館の制度と機能 3・16p | 図書館情報資料 4・15p |
| 第７章 | 図書館の建設と設備 4・12p | 図書館の自由、社会的責任と図書館員の倫理綱領 5・10p | 大学図書館の制度と機能 3・13p | 図書館の技術 3・18p |
| 第８章 | 図書館の自由 4・38p | 図書館関係団体とその活動 2・9p | 専門図書館の制度と機能 3・12p | 図書館サービス 4・25 |
| 第９章 | 図書館の職員 4・31p | （資料　関連法規基準15種） 33p | 国立図書館の制度と機能 3・16p | 図書館経営 3・14p |
| 第10章 | 図書館学とは何か 2・19p | | 図書館の歴史的展開 3・13p | 図書館員の職務 2・15p |
| 第11章 | （付録　7） | | 外国の図書館 4・18p | 図書館利用教育 3・19p |
| 第12章 | | | 図書館のネットワーク 4・19p | |
| 第13章 | | | 図書館関係団体４ 4・18p | |
| 全体の頁数 | 237頁 | 267頁 | 284頁 | 230頁 |

各章欄の数字は前半が小節数、後半が頁数

⑥が第３章、６小節で78頁、T⑦が第５章から第９章まで、５章81頁でほぼ同じである。T⑥とT⑦の章のテーマの違いは、２つ、T⑦に外国の図

書館の章と地域社会と図書館の章があることである。頁数の違いでは、図書館の自由に関する章が、T⑥の該当第7章、10頁に対して、T⑦の該当第3章、42頁で大きな差がある。

T⑤は、章の構成がT⑥やT⑦と少し異なっている。T⑤の第6章の図書館の経営管理、第7章の図書館の建設と設備、第9章の図書館の職員および第10章の図書館学とは何かの4章は、T⑥、T⑦では独立の章が無い。第3章の図書館の種類は5館種を扱うが、全体で13頁であって、T⑥やT⑦の78頁、81頁より著しく少ない。反対に、T⑤で頁数が多く割り当てられている章は、第8章の図書館の自由が38頁、第9章の図書館の職員が31頁、第10章の図書館学とは何かが19頁である。T⑧の参考テキストは、他の3テキストとは少し異なっているのが章のテーマから知られるであろう。第1章の図書館情報学へようこそ、第6章の図書館情報資料等の設定および、章の表題では分からないが第5章の図書館活動の新展開の内容は、書誌情報の電子化と電子図書館であって、これらの3章が一部情報学の分野を取り入れた構成であること、また、図書館の技術やサービスの章も設けてあるのが特徴である。T⑧の執筆代表者が、まえがきで、「図書館情報学の学習は現代ではいづれの大学でも必須のものと位置づけるべきで」・・・「一般市民も図書館からサービスを受ける前提として最少限の知識をわきまえておいてもらいたい」[⑥]と述べているように、T⑧は、専門的学習に資するとともに、一般教養も意図したテキストである。以上、章のテーマおよび構成に基づいた「概論」の概観である。

## 7　「図書館概論」の内容と各テキストの特徴

前述の「通論」と同様、表3の内容項目から特徴を探ってみよう。各テキストで取り上げられた項目数は、T⑦が29、T⑥が23、T⑤が22で多少の開きはあるが、「通論」ほどの大きな差はない。T⑥とT⑦には共通の項目が多いが、これらのテキストとT⑤には顕著な相違が認められ

る。T⑥とT⑦にあってT⑤に無い項目が、次のとおり数多くある。図書館の歴史、図書館の基準、図書館協力、点字図書館、図書館関係団体、出版流通等の項目である。反対に、T⑤にはあるがT⑥、T⑦では取り上げられていない項目は、図書館経営、管理、組織、図書館建築、設備、専門性等である。T⑤は館種ごとの記述が少なく、現状の問題点や課題について詳しくない。図書館の一般的経営管理面に、一つは重点を置いている。図書館の職員や図書館の自由に関する頁数が多く、図書館を機能させる人的基盤と思想的基盤にもう一つの重点を置いている。頁数の比重から判断すると、様々なテーマをある程度均等に扱う教科書的な構成を採用していないのが特徴である。T⑥は、各種図書館の現状の問題点と課題を中心にこれに関連してネットワークや行政など、いくつかのテーマをバランスよく構成している。執筆者が16人と今回のテキストの中では最も多い。各テーマ、分野の専門家によって最新の状況を提供する意図であろうか。巻末資料では、学校図書館関係の法規、基準が充実している。また、各章ごとに演習問題が用意されていて学習の利便を図っている。T⑤とは違って教科書目的のテキストである。T⑦の特徴は次のとおり。①T⑤と対照的に経営管理面の比重が小さいこと。②館種別に章を設けて、それぞれ制度と機能を統一的に取り上げ、問題点と課題を論じていること。③図書館の理念を重視して、特に図書館の自由を詳説していること。④まちづくりや文庫活動、住民運動等地域および社会とのさまざまな関係を取り上げていること。⑤外国の図書館の章を設けて、アメリカやイギリスだけでなく、北欧や中国等の図書館事情も紹介していること。⑥付録、資料は、T⑤やT⑥が用意している法規、基準類のほかに政策や年表等各章ごとに分散して紹介しているが、あわせて26種、57頁に及び、多様で量的にも多いこと、などである。

## 8　樹村房版「図書館通論」と「図書館概論」の比較

樹村房は、1982年に「図書館通論」の初版を発行して以来、「通論」の

改訂を経て、2005年に「概論」の改訂版を発行するまで、この分野で長い歴史を重ねている。今日までの時代の流れの中でどのように変化をきたしたか、検証するのに相応しいテキストといえよう。取り上げるテキストは、下記の４種である。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| T⑨ | 図書館通論 | 1984年 | | 中村初雄ほか |
| T⑩ | 図書館通論 | 1989年 | 改訂版 | 中村初雄ほか |
| T⑪ | 図書館概論 | 2003年 | | 前島重方ほか |
| T⑫ | 図書館概論 | 2005年 | 改訂版 | 植松貞夫ほか |

各テキストの章の構成と章のテーマおよび各章の小節数と各章の頁数および全体の頁数を表５に表した。

最初に、T⑨とT⑩の「通論」を見よう。章のテーマは１章を除いて同じである。T⑨第２章の図書館の社会における役割がT⑩にはない。しかし、このテーマはT⑩第１章の５節に同一名称で収められているので、章の構成は同じと見られる。頁数は、T⑩の方が８頁ほど多い。これは、T⑩の第１章に、T⑨には無い、図書館の定義、ライブラリアンシップ等の内容が追加されているためである。T⑨とT⑩で取り上げられている項目を表３で見ると、ほとんど同じである。取り上げられていない項目は、図書館の行財政、法規、経営、管理、著作権等多数ある。図書館の社会における役割というテーマは、両方にあるが、情報化や生涯教育、地域との関係に言及した記述はほとんど見られない。T⑩は改訂版とはいえ、章のテーマ、構成及び内容項目等全体的にT⑨と大きな変化は無いように思われる。

続いて、T⑪とT⑫の「概論」を取り上げる。章の数は、T⑪が10章、T⑫は８章で、T⑪が多い。頁数は、反対に、章の数の多いT⑪の方は183頁、章の数の少ないT⑫が197頁で、章の数とは比例していない。T⑪がT⑫より２章分多いのは、図書館サービス関係２章分と館種別各館の章がT⑫には無く、反対に、T⑫の図書館情報学の章がT⑪に無いのがその理由である。T⑪の10頁以下の章、３章がT⑫では整理された。この３

表５　樹村房発行の図書館通論と図書館概論の章の構成とテーマ

| | T⑨ | T⑩ | T⑪ | T⑫ |
|---|---|---|---|---|
| 第１章 | 図書館とは何か 3・40p | 図書館とは何か 5・46p | 図書館の果たす役割 5・31p | 図書館の意義　果たす役割 2・29p |
| 第２章 | 図書館の社会における役割 3・9p | 図書館の発展 2・25p | 図書館を構成する要素 4・8p | 図書館のしくみ２) 2・21p |
| 第３章 | 図書館の発展 2．23p | 図書館の現状 6・67p | 図書館の種類その機能と課題 3・34p | 図書館の種類その機能と課題 5・38p |
| 第４章 | 図書館の現状 6・57p | 図書館の業務 3・28p | 図書館サービスの業務 4・20p | 図書館に関する法律と行政 2・23p |
| 第５章 | 図書館の業務 3・26p | 図書館職員 6・16p | 図書館の利用者とサービス 3・13p | 図書館協力とネットワーク 3・15p |
| 第６章 | 図書館職員 4・16p | | 図書館の経営と行政 3・9p | 図書館の歴史 5・18p |
| 第７章 | | | 図書館職員 4・16p | 図書館職員と図書館専門団体２・19 |
| 第８章 | | | 図書館協力とネットワーク 4・13p | 図書館学　図書館情報学 4・12p |
| 第９章 | | | 図書館の発展 2・18p | ［付３］ |
| 第10章 | | | 館種別各館 3・9p［資料１］ | |
| 全体の頁数 | 184頁 | 192頁 | 183頁 | 197頁 |

各章欄の数字の前半は小節数、後半は頁数

章を除いてT⑪とT⑫は、章のテーマが６つほぼ同一で、内容項目の違いが２、３と少ない。その違いは、図書館サービスと図書館経営の章の有無による。1996年の図書館法施行規則でそれらの科目が独立したことによって、改訂版で省いた結果である。これらの４テキストは、1980年代からおよそ20年間にわたっていて、全体を通してみると時代による内容変化が著しい。

## 9　図書館概論の性格と内容構成要因について

ここまで、「通論」と「概論」を３つのグループに分けてその内容を概観してきた。判明したことは、「通論」に共通する14の基本的内容項目は、「概論」でも共通項目であり、これに「通論」にはない「概論」の共通項目である図書館政策、図書館協力、図書館員の倫理綱領、図書館職員の研修、出版流通が加わって、「概論」の基本的内容が構成されている。「通論」から「概論」の内容構成の変化の要因のひとつは、時代環境にあるが、そのほかには何が「概論」の内容を規定するのか、これまでの検証をふまえて考える。

図書館概論には２つの性格がある。ひとつは専門家教育養成のため。もうひとつは、学生や一般人の教養知識の側面である。ここで取り上げた12のテキストのうち、11は前者を目的としたもので、T⑧だけ、一般教養も意図したテキストである。かって、25年程前に、司書課程の教科書は複数出現してよい[7]と言われていたが、現在では、今回のテキスト以外にも多種多様な教科書が刊行されている。また、教科書の中にはページ数が少ないため・・・深く学習したい人には物足りない内容にとどまっているものが見られた[8]が、これも逐次改善されてきた。そのことは、ここまでのテキスト比較で、頁数によるボリュウムにおいて、内容的には内容項目の質量の充実によって明らかであろう。この小論で対象にしたのは司書養成のための図書館概論であるが、その内容については、テキストの編者、執筆者による性格付けによってさまざまである。図書館の意義、種類、機能など図書館に関する諸問題を概観展望しいわば他の科目に対する総論、オリエンテーションとしての役割を果たすことにある。[9]あるいは、図書館通論というのは図書館の管理とサービスの入門書である、[10]等々。図書館サービス論、図書館経営論などの他の科目は固有の領域を持っているので、内容は自ずから規定される。しかし、概論は図書館全般が対象のため、固有の領域を持たないように思えるが、他の諸科目の基底を成し、諸科目全般の拠り所となる要素が存在

するのではないか、概論の内容を規定する要因がいくつか考えられる。

**（1）図書館の成立および存続に関わる事項**

図書館が存在しなければ「図書館概論」はあり得ず、内容も考えられない。従って、図書館を成立させ、存続させている事項が欠かせない。図書館を構成する諸要素と理念、および思想的根拠などが該当する。12のテキストほとんどが取り上げているが、理念や思想的根拠を欠いたテキストがいくつか見受けられる。

**（2）司書課程の他の科目との関係**

「概論」は図書館全般が対象であるため、他の科目の内容を部分的に取り込んでいる。それらは、その科目以外の諸科目を学ぶ前提としても必須の基本的事項を含み、相互関係をなしている。内容事項の増減、科目としての分離独立等の変化は「概論」に影響する。

**（3）図書館に関する法的規制、基準との関係**

図書館法施行規則が1996年に一部改正されて科目の変更や新設が行われた。図書館経営論、図書館サービス論の科目新設によって「概論」のテキストが改訂された。大学基準協会の図書館情報学教育基準では、「概論」が「図書館情報学」として、幅広い体系の中に拡大して位置づけられた。

**（4）社会的、時代的環境の変化**

図書館は社会制度上の一機関であるため、時代時代の社会環境の変化によって図書館の位置づけや役割機能は、部分的にその解釈を変えてきた。図書館学も、その一部門を成す「概論」も、新しい知識や技術、およびそれまでは意識されなかった思想や概念を取り入れたり、重点の置き所を変えてきた。カリキュラムは教育者が社会の変化に対応するために使用する方法であり、必要とする最近の知識と技術は、一定の教育期間の中ですべて教えられるよう準備しなければならない。12のテキストの章のテーマと内容項目をあらわした表を見比べるならば、時代による変化が良く分かる。図書館の自由や図書館員の倫理綱領、著作権など

は、以前問題にならなかった。情報学や電子化は、現在、「概論」での扱いは少ないが、今後進化する項目で比重が増すであろう。

**（5）関連の学問、技術の影響**

図書館学と関連科学や技術との影響は、さまざまな文献で論じられている。近年で最大の影響は、コンピュータと通信技術の発達である。「概論」では、ネットワーク、図書館協力、電子化等の項目が年代の古いテキストで取り上げられていない。図書館が社会のいろいろな現象や枠組みの中で論及されるので、これまでも、経営学や統計学、教育学等と密接な関連を有していたが、今後も、特に社会科学の諸分野の影響が大きいと思われる。

**（6）その他、頁数、付録、資料など**

「概論」の内容を直接規定するのではないが、ある程度の容量（頁数）が無ければ内容は制約を受ける。授業の展開、テキストの用い方によって、容量の大小が問題にならない場合があるが、テキストが学習の主要な拠り所と考えると、最大限容量を大きくしたい。法規、綱領、基準、宣言等は、一般的には、付録または資料としてテキスト内に用意されているが、全く無いテキストもある。資料集として別に刊行物が存在するが、手じかに使うためにはそのテキスト内で最小限備えたい。演習問題を備えたテキストは少ないが、問題点の認識および自己学習の利便に備えたほうが良いであろう。

## 10　おわりに

図書館学の教科書の内容に関する文献は少ない。私が知りえたのは2点、津田良成の論文[11]と西田文男ほか5名編成の図書館奉仕研究グループによる研究発表である。前者は教科書の出版状況および教育担当者が使用している教科書のリストと使用状況の報告であり、内容には及んでいない。後者は「通論」の内容調査に若干の分析がなされている。しかし、20年ほど前の報告であって、「概論」は含まれていないし、調査内

容、分析方法が私とは異なる。

この小論では、テキストの章のテーマと内容項目を中心に、「通論」と「概論」、12点を検証した。それぞれの内容を構成する基本的項目と各テキストのおおよその特徴が分かった。これをいっそう深めて内容分析および評価を行うにはいくつかの特定のテーマについて、その取り上げ方、記述の仕方、記述量等、細部にわたって比較考察する必要があるが、別の機会にしたい。

## 注・引用文献


① 図書館奉仕研究グループ「図書館奉仕はどのように教えられているか－図書館通論テキストの分析を中心に－」図書館界 vol.38 no.2 1986 p.94

② 竹内 悊「わが国の図書館学教育1892－1955」(論集・図書館学研究の歩み 第3集) 日外アソシエーツ 1983 p.5—40

③ 青木次彦「同志社大学図書館学教育史稿」(論集・図書館学研究の歩み 第3集) 日外アソシエーツ 1983 p.44

④ 竹内 悊 前掲 p.17

⑤ 本書は「通論」、「概論」ではないが、これらとの違いが分かるのでここに含めた

⑥ 藤野幸雄 荒岡興太郎 山本順一「図書館情報学入門」 有斐閣 1990

⑦ 藤野幸雄「図書館学の研究」(論集・図書館学研究の歩み 第1集) 日外アソシエーツ 1981 p.11

⑧ 薬袋秀樹「日本における公共図書館学の実践的課題」(論集・図書館情報学研究の歩み 第18集) 日外アソシエーツ 1998 p.153

⑨ 北嶋武彦「図書館概論」(新現代図書館学講座2) 東京書籍 1998

⑩ 彌吉光長「図書館通論」(図書館学テキストシリーズ1) 理想社

1982　p.18

⑪　津田良成「わが国の図書館・情報学教育で使用されている教科書および参考書」Library and Information Science no.16 1978　p.93－114